
陽炎、真夏の風

土方沙音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽炎、真夏の風

【Zコード】

N9779E

【作者名】

土方沙音

【あらすじ】

「へした『自分探し』の旅に出た『僕』は、ある寂れた駅に立ち寄る。そこで『僕』が出会った不思議な少女。そして『僕』の旅は

ガタンガタンと、目の前を長い長い貨物列車が走り抜ける。日に十本あるかないかの田舎のローカル線。寂れて誰も居ない、駅員すらないないそこのベンチに、僕はいる。当てもない、感性と惰性によつた静寂の行脚の果て、この名もわからぬ廃墟じみた駅に辿り着いた。道連れは黒いボストンバックが一つだけ。

ある、七月の話だ。

照る日光を防ぐ屋根すらないここに、もう何時間居るのか、判らない。ただ、貨物の走る音と蝉の鳴き声だけが耳障りなくらいに、もうずつと響いてる。

日光が、鬱陶しい。

ガタン、長い貨物列車の最後尾が走り去つた。

「やあ」

ふと蝉の声とは違うものが聞こえた。

聞こえたほうを見ると人が居た。女の子だ。白い肌にふちの大きな黒い帽子と紺の、たしかゴスロリとかいうフリルがたくさん付いたドレス。多分、僕より4、5歳は下だと思う。

「隣にいいかな？」

女の子は僕の隣、ベンチの空きスペースを指した。断る理由もない、僕は彼女を招き寄せた。

「ありがとう」

お辞儀しながら女の子が座る。

不思議な子だ。この炎天下に黒っぽいドレスなんか着ている。なのに額には汗1つ浮いてない。

「どうしたんだい、こんな辺鄙なところに？」

女の子が僕の顔を覗きながら訊ねてくる。綺麗な瞳に、吸い込まれ

そうな、そんな錯覚を覚える。

気付けば口を開いていた。

「亡くした、自分を探してるんだ」

「自分探しの旅、つてやつかい？」

「似たようなもの、かな」

不思議と、話そうとしないことが次々出てくる。

「僕は昔から他人のイエスマントでね、自分の意見なんでものを持ったことがなかつたんだ」

そう、昔からそうだ。主体性なんかなく、他人の意見にすがつて過ごしてきた。何年も何年も、依存するだけで『自分』を持たずに生きてきた。

「そして、やがて気がついた。僕は死んでいるつて。『自分』を持たない人間はただの肉人形に過ぎないつて」

生きてなんかいないんだ、僕は。

気がついた瞬間、僕の世界は粉々になった。見るもの聞こえるもの全てに「お前は死人だ」と言っている気がして、気が付けば僕は逃げ出していた。当てもなく、思つままに流されて。

「だから僕は、僕自身を生き返らせる為に自分を探すことにしたんだ」

生き返らせるつていうのもヘンだけど、実際僕は『僕』としては生きていらない。

そして、これはとても大変なことだと、飛び出してから気がついた。何せ終わりの無い旅だ。スタートは無価値の崩壊、ゴールは『自分』という見えない何かを手に入れる事。見えない触れないものをどう見つけねばいい？

「情けない話だけどね。でも、今までの怠惰の代償なら受け入れなきやね」

「随分達觀しているんだね」

「それは君にも言えるんじやない？」

不思議な子だ。歳の割に妙に大人びた雰囲気、彼女の瞳に、気付け

ば身の上を話していた。良くも悪くも、変わった子だと思つ。

「ふふつ、確かに変わった奴だとよく言われるね」

「あつ、ごめん。気を悪くさせてしまったかな？」

謝罪すると、彼女はふふつと微笑んだ。

「気にはしなさ、ボク自身そう思うからね」

そういうて、ベンチから立ち上がり、僕の前に来る。向き合つ形で、彼女は身をかがめて僕を覗き込んでくる。

「君は、今までどれくらいの人間にあつてきたんだい？」
いきなりそう聞かれた。最初、何のことを言つてているのか判らなかつた。

「コレはボクの私見だけどね……『自分』っていうものは、その人間の歩んだ道のりに沿つて形作られるものだと思うんだ」

遅れて、この子の言いたい事がわかつってきた。彼女は、恐らく僕の旅の終焉を示そうとしているのだろう。自我の精製法、とでも言つべきものを。

「人はね、一人では生きていけないんだ。他人と交わり、励まし競い、暖めあう」

彼女の言つことは判る。人が 生物が生きていいくにはどうしても『他人』が必要だ。愉楽だろうが、衣食だろうが、生存だろうが。「だけど、人は他の人の考えることはわからない。超能力者ではないからね。君は……どうかな？」

おどけた風に訊ねてくる。勿論僕はそんな特別なものではない。何処にでも居る平凡な、でも何処にも居てはいけないものだ。

「ふふつ、そう自虐にならないで。ともかく人間同士には相手を理解しきれない壁があるんだ。誰にだつて隠しておきたいこと、知られたくないものがあるからね」

「君にあるのかい？」

ふと、おもわず僕は訊ねていた。すると彼女はキヨトンとした表情をして、次にはクスクス笑つていた。

「そりやあるさ。ボクにだつて秘密の一つや二つ、乙女の謎つてや

ツがね

彼女はそつ言い、その場でぐるっとステップを踏んだ。

思わず吹き出してしまった。

「むう？ なんか感じ悪いなあ……」

「ははつ、だつて随分ませたこと言つからせ」

しばしの沈黙。すると彼女は「ごそごそドレスのポケットを漁り、財布のような物を取り出す。そこから一枚の紙を出して僕に差し出してきた。それを受け取り眺める。

「保険証？ ……えつ、 同い年！？」

そこにあるのは、僕と同じ年に、彼女が生まれたという公的証明。

「初対面の女の子に、ちょっと失礼なんじやないかな？」

「ごひつ、ごめん……」

「これでも気にしてるんだからね、背が小さいのは」
頬を膨らましながらそっぽを向かれてしまった。……まいつたなあ。

初対面の子に随分と粗相をしてしまった。

「ごめん……だから機嫌を直して？」

「……まあ、反省してるならいいけどね。話を戻そう

「ごめんなさい……」

一応許してくれたらしく、彼女は再び僕の隣

今度はベンチの反

対側 に座ってきた。

「とにかく、人間には壁があつて、他人を遠ざける。一番深いところには誰も入れさせない」

ふと、彼女が帽子を脱いだ。短いが、透き通るような蒼い髪。空の色、海の色ともいえる、だけどどんな青よりも蒼らしい。

風が、吹いた。今まで蒸し暑いだけの駅に、風が駆け抜けた。彼女が立つ。その小さな手には大きな黒い帽子。それを、

「あ……」

風に乗せるよう、それを投げた。

何処までも、黒いそれは高く、何処までも高く飛んでいく。

「けどね

」

声に振り向く。風に髪をなびかせながら、帽子を見つめながら少女は言つ。

「他人と壁があるからこそ、自分を認識できるんだよ。君はボクを小さいと言つた。『他人』の君はボクをそう認識し、ボクは『自分』の力タチを思い知る。言葉に善悪はないけど……聞き手の捕らえ方でそれは色付く」

気が付いたら、彼女に向かい合つていた。持つていたはずのバツクなんて、とっくに手から落ちていた。

「君は……」

「んつ？」

「君は 誰？」

「それを決めるのは君さ。けど」

ぐいっ、と目の前一杯に彼女の顔がある。両手で顔を掴まれて、向かい合わされている。彼女の綺麗な瞳が、僕を見つめる。

「君にとつて、ボクとの出会いが、良かつたって思えるものなら僕倖さ」

手に力がこめられる。彼女の方へと引き寄せられて……。

誰も居ない、名も無い駅のホームに僕はいる。蝉の声だけが絶え間なく、怒号のように鳴り響く。当てもない『自分探し』の旅。感性と惰性だけでここまで来た。旅の道連れは黒いボストンバックが一つだけ。

遠くからガタンガタンと電車の足音が。後は蝉の声だけ。

「少しだけ……」

目の前を通り過ぎる列車。長い長い貨物列車。

「少しだけ、わかつた気がするよ」

通り過ぎる列車。少し短い。蝉の声は相変わらず。

僕はホームから線路に降り立つた。後ろはトンネルがある。出口が見えず、長いと判る。けど前には何処までも続く一本のレール。果ては見えないけど、この先には駅がある。

夏の日差しは、何処までも照らしていく。僕は、手に持っていた黒い、ふちの大きな帽子をかぶつて、レールに沿つて歩き出した。

この旅の終わりは見えないものを見つけること。途方もないことだ。

「でも

帽子のふち越しに空を見る。風が、吹いた。蒸し暑いだけの日差しに、肌心地のよい風が加わった。風は唇になびき、蒼い匂いを残していく。

ある、七月の話だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779e/>

陽炎、真夏の風

2010年12月12日14時52分発行